詠む広場

毎日俳壇

小川　軽舟　選

夕端居柱時計が七つ打ち
大阪市　吉田　昌之

△評▽湯上がりの端居もとっぷり日が暮れた。午後7時になったが夕飯はまだか。家で何もしない昭和の男の生き残りである。

あてのなき有給休暇ソーダ水
下関市　福永　浩隆

△評▽消化するだけの有給休暇らしい。ソーダ水に差す日が寂しくかげりはじめた。

古書市に探す下巻や風薫る
神戸市　田代　真一

一望の水平線や夏料理
東京　小栗しづゑ

騎馬団のごと埃上げ驟雨来る
兵庫　小林　恕水

炎昼や博物館のメダリオン
東京　夏目　そよ

ナイターや売り子おおきく返事して
雲南市　熱田　俊月

緑さす空港ゆきのバスの窓
松本市　上月くるを

若竹や河は豊かに蛇行して
沼津市　川井大次郎

大瑠璃の鳴き声近し里林
宇治市　鬼界　時三

西村　和子　選

火蛾死して金粉暗む夜明けかな
東京　石川　黎

△評▽夜の灯火に集うガの夜明けの状態を描いて、明暗の対比が鮮やか。明るくなってからも妖しさをまとっているようだ。

翔ぶことも潜ることさへあめんぼう
奈良市　上田　秋霜

△評▽水輪が目立つアメンボだが、よく見つめていると、こんな動きもする。純真な発見。

夕立のあがり艶めく電波塔
東京　野上　卓

少年に日傘の母のうっとうし
葛城市　八木　誠

炎昼や影のしやきつとしてきたる
川越市　峰尾　雅彦

立葵咲き切つて雲蹴散らす
国分寺市　野々村澄夫

マンション群浮かぶ川面の大夕焼
東京　畠山　道雄

梅雨茸を足蹴にかくる嫗かな
北九州市　浅野　家興

膝の子のふと重くなる団扇風
北本市　萩原　行博

松籟を妻と分けあう端居かな
妙高市　山下　稔

井上　康明　選

雲まぶしプールの底にブラシ立て
宇陀市　泉尾　武則

△評▽水を抜いたプールの底を、デッキブラシでこすって汚れを落とす。炎天下のプール掃除、太陽と白雲がまぶしい。

僧と会ふ泰山木の花の下
久留米市　持地　恒美

△評▽香り高い花の下、壮年の僧と会うのだろう。一幅の絵のような、高雅な光景を描く。

夕刊を取るあぢさゐに触れぬやう
平塚市　高橋　佳代

少年のかひなに余る梅雨鯰
名古屋市　可知　豊親

どこを見上げても青空ラムネ飲む
甲府市　村田　一広

一日の汗を集めて山手線
横浜市　田中　清春

星の声聞こえさうなる端居かな
唐津市　梶山　守

コンビニに少年一人梅雨の月
周南市　九内　千沙

噴水の頂に神あそびをり
岸和田市　妙中　正

口笛の次第に近し帰省の子
相模原市　はやし　央

片山由美子　選

蛍籠そつと揺すれば光りけり
名古屋市　平田　秀

△評▽橋本多佳子の△蛍籠昏ければ揺り炎えたたす▽の激しさを意識してか、「そつと揺すれば」がこの句のポイントに。

水打つて今日といふ日と別れけり
大阪市　隠樹ノリエ

△評▽水を打って一日を終えたということだが、中七・下五に詩情がある。大切に生きる日々。

紫陽花や術後二年といふ月日
東京　生嶋　敏

やはらかく風の触れゐる青田かな
館山市　岡﨑　建一

子の好きな電車を見せに青田道
羽生市　今成　公江

しばらくは淋しき色の七変化
さぬき市　景山　典子

日雷骨董市はのぞくだけ
大阪市　福永　都女

梅雨晴や海にもどりし海の色
川崎市　露木　秋子

梅雨曇り水平線が消えてゆき
福岡市　内藤　幸生

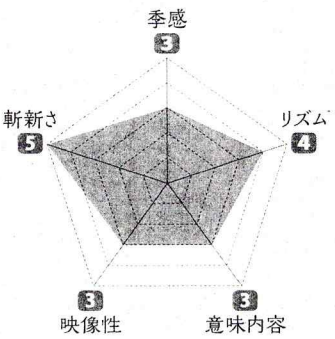
奥入瀬の瀬音変らぬ青胡桃
東京　山口　照男

俳句てふてふ　注目の一句

円堂実花

ここだけの話だけどと心太
まつおひとし3

チャートで採点



季語「心太」を使った一句です。ところてんは仏教伝来のころに中国から伝わったとされ、江戸時代には広く庶民にも好まれる食べ物になりました。当時の三大俳人と言われる松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶も句に詠んでいます。

掲句では登場人物の「ここだけの話だけど」という思わせぶりな前置きと、ところてんの取り合わせが面白い効果をあげています。ところてん突きからつるんと出されるイメージが、ここだけと言いつつこなれて流ちょうな語り口や、話したくて仕方のない様子を思わせます。あまり良くない話にも使われる前置きですが、ところてんの清涼感のおかげで重くはなく、楽しい一句になりました。（えんどう・みか＝俳人）

アプリ
俳句てふてふ

全国景勝地俳句コンテスト　俳句てふてふは富士五湖や耶馬渓など133景勝地にちなんだ俳句を募集中。1930（昭和5）年に高浜虚子選で実施した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑廣太郎さんと星野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。

アプリのダウンロードはこちら